

## 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討

速水敏彦 木野和代<sup>1)</sup> 高木邦子<sup>2)</sup>

### 問題

人は誰も基本的には有能でありたいと願いながら生きている。それは、人間がよりよく生きていくために本来的にそなわったものかもしれないし、社会が人々に様々な領域での有能さを求めているからだともいえる。学校で有能であること、職場で有能であること、あるいはインフォーマルな集団の中でさえ、有能であることは当事者のみならず、集団の仲間が求めていることでもある。そして、有能であることで本人自身の満足感、幸福感を招来することができる。

しかし、世の中は誰もが有能さを享受できるような仕組みにはなっていない。有能さを享受できるのはごく一部の人間で、その他の多くはむしろ無能さを体験する場面に遭遇することが少なくない。かといって人間社会で幸せに生きていく以上、人は無能のままでよいというわけにはいかない。そこで人はさらに有能感を求め続ける。

ところで、特に個人主義が浸透した社会の中で人々の人間関係は希薄化し、親密な関係を形成することが少なくなった。そのような中で他者の行動を傍観的に眺め、少しでも失敗や落ち度があれば、批判したり非難したりすることが現代人には増加しているように思われる。香山リカ(2004)によれば、現代の若者には「バカだといわれたらどうしよう、『負け組』になってしまったらどうしよう」という「不安」が自らの内側にあるために、先に相手に「バカ」「負け」と攻撃して「自分はそうじゃない」と確認しようとするのだという。そのような他者の能力の軽視が実は自分の仮の有能感を回復させることに繋がっているように思われる。先に述べたように現実的な有能感が十分にえられないことで人は無意識的に他者軽視を通して有能感をえようとしているのかもしれない。しかし、そこでえられる有能感とは所詮、真実でない、

仮想的な有能感なのである。

そこで、本研究では、「仮想的有能感」という新たな概念を提案する。仮想的有能感を定義すれば「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」とまとめることができる。他者を軽視することは一種の他者評価で仮想的有能感を感じることは一種の自己評価であるが、自覚の程度は他者評価の場合の方が高いと考えられる。仮想的有能感そのものは、日常的にはほとんど自覚されないように思われる。しかし、何かの折りに他者軽視をすることで潜在的に求めていた有能感やプライドを一時的に体験するのである。

我々は個人の他者軽視傾向を測定することで仮想的有能感を推測しようと考え、尺度を構成した(Assumed Competence Scale: 以降ACSと略記)。この尺度が他の尺度と異なるのは、項目内容という点では他者軽視するか、しないかを問題にしているが、実際には背後に潜む仮想的有能感を測定しようとしている点である。無意識的な仮想的有能感の強さは意識可能な他者軽視の強さに反映されるものという前提から成立している。しかし、そのような前提が正しいかどうかは、様々な角度からの妥当性の検討を要するであろう。

本研究では関連すると考えられる他の構成概念との関係を検討することで仮想的有能感の構成概念妥当性を検証しようとする。もし、仮想的有能感の測定が妥当であれば、その概念上の論理からは他の心理学的構成概念との間には一定の関係が予想されるはずで、本研究ではそれを確認しようとする。また、本研究では仮想的有能感と対比的に、一見類似しているが、概念構成上はまったく異なる「自尊感情」も取り上げ、他の心理学的構成概念との関係を見ていこうとする。前述したようにACSが表面的には他者評価をしているものであるのに対して、自尊感情は自己評価である。極端な言い方をすれば、直接的には他者をどれほど高く、あるいは低く評価するかがACSで捉えられており、自分をどれほど高く、あるいは低く評価するかが自尊感情で捉えられるともいえる。また、自尊感情は仮想的有能感とは異なり、自信を獲得

1) 広島国際大学人間環境学部

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程(後期課程)

できるような成功経験をとおして比較的妥当に自己を評価したり、他者に評価されることでえられたものと推測される。自尊感情は「自分自身による『自分』への肯定的評価」(Baumeister, 1998), 「自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚」(遠藤, 1992) と定義される。なお以前の研究で ACS と自尊感情の相関は .034 で無相関であった (速水・木野・高木, 2003)。すなわち、自尊感情は仮想的有能感とは明らかに弁別される概念なのである。

さて、次に本研究で用いられた他の心理的構成概念の内容、さらにその構成概念と仮想的有能感および自尊感情との予想される関係について述べておこう。

### ①統制の位置 (Locus of Control)

Rotter (1966) のいう統制の位置は内的統制—外的統制の程度を意味するが、内的統制は自分の内的な能力や努力が個人の成功や失敗、あるいは正負の社会的象徴に随伴しているという信念を強くもつことを含意し、外的統制はそのような行動と結果 (強化) の間に随伴性がなく、運や偶然で事が決まるという強い信念をもつことを含意する。自尊感情が強いことは成功・失敗経験に基づくのに対して仮想的有能感とは無関係に感じられるものであることから、自尊感情の高さは内的統制傾向と正の関係が予想されるのに対して仮想的有能感の高さは内的統制傾向と負あるいは無相関と予想される。なぜなら、仮想的有能感とは自分の力量を反映した達成に関係なく、他者軽視により形成されるからである。

### ②自意識

自意識は公的自意識と私的自意識に分けられるが、前者は自己の外見や他者に対する言動など、他者が観察しうる自己の側面に注意を向ける程度であり、他方、後者は自分の内面や感情、気分など他者からは観察されない自分の側面に注意を向ける程度である。仮想的有能感の高い人は現実にはあまり有能感が満たされているわけではないので、たえず無意識的にしろ、他者軽視的な刺激を求めて自分の有能感を高めようとしていることを考えると自分の内面には相当関心が強くてしかるべきと考えられる。つまり、仮想的有能感の高い人は私的自意識が高いと予想される。一方、自尊感情の高い人は自分に一定の自信をもっており、他者から観察しうる部分、観察しえない部分に関係なく過剰な自意識はなく、公的自意識も私的自意識もあまり高くないと予想される。

### ③孤独感

多くの人と積極的に交わることのできる人たちは他者の人格も尊重しているように思われる。一方、他者軽視をする人は他者に共感できないということで孤独感を抱いているのではないかと予想される。そこで本研究では

落合(1983)による孤独感の類型判別尺度との関係を明らかにしようとする。ACSが妥当ならば、孤独感の人間同士共感しあえると感じ、考えているか否かという理解の次元とは負の関係が、孤独感の人間の個別性に気づいているか否かに関する個別性の次元とは正の関係が予想される。すなわち、他者軽視傾向が強く、ACSの高い人は、人間同士共感しあえないと感じ、人間の個別性を強く意識していると予想される。一方、自尊感情の高い人はそのような孤独感の次元と無関係と考えられる。

### ④共感性

前述したように、他者軽視に基づいて仮想的有能感を感じる背景として彼らの共感性が低いことが関係していると予想される。逆に言えば共感性が高ければ、他者の立場が理解でき、おいそれと他者軽視をするようなこともないと考えられる。それ故、ACSで仮想的有能感が妥当に測定されているとすると共感性の高さは負の関係が予想される。一方、自尊感情の高さはむしろ共感性を抱く余地を与えるように思われる。

### ⑤怒りの感情

他者を軽視して自分の有能さを感じることは他者との衝突が生じた時、悲しみよりは怒りを生じやすいと推測される。自分が他者よりも優位に立つことで怒りが生じやすくなるのである。怒りは地位の高い者から低い者に対して示されやすい感情である。他方、自尊感情の高い人は自分に自信をもっているため些細な他者との衝突などで怒ったりしないものと考えられる。従って ACS と怒りの感情の生じ易さは正の関係が、自尊感情とそれとは無相関あるいは負の関係が予想される。

### ⑥感情経験 (過去3ヶ月)

日常の感情経験に関して、快感情、不快感情という大きな分類からすれば自尊感情の高い人は快感情を感じやすいのに対して、ACSの高い人は真の有能感が十分に満たされないために、また、他者軽視することで妬みや恨み等が生じるため不快感情が高まると予想される。

### ⑦生活満足度

これは上記の感情経験とはほぼパラレルに考えられよう。すなわち、ACSで仮想的有能感が妥当に測定されていれば生活満足度は概して低く、自尊感情が高い方が生活満足度は高いであろう。

## 方法

### 1. 調査対象

ACSと自尊感情は短期大学生124名、四年制大学生258名、大学院生11名の計393名 (男性128名、女性264名、不明1名) が対象となった。他の尺度については全員にすべての尺度を実施することが時間的に困難であっ

たため、これらの被調査者の一部が対象となった。自意識と孤独感は75名、怒りの感情と統制の位置に関しては120名、共感性、生活感情、生活満足度に関しては125名が対象となった。

## 2. 調査内容

1) 仮想的有能感：「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」という定義に従い、Table 1 のような11項目からなる尺度（ACS-Version 1）を構成した。ただし、ここでいう有能感は細かな領域別のもではなく、自己価値というような幅広いものである。また評価対象となる他者として世間一般の他者を想定した項目を5項目、より身近な経験の中での他者を想定した項目を6項目用意した。回答は「1：全く思わない」から「7：頻繁に思う」までの7段階の評定尺度上で求められた。この尺度の因子分析結果や信頼性係数は別の論文（速水・木野・高木 投稿中）で示しているので省略するが一次元尺度であり、再検査信頼性も高い。

Table 1 ACS-Version 1の項目内容

項	目
(1)	周囲の人のセンスの悪さや感性の鈍さが気になる
(2)	他人の仕事を見ていると要領が悪いと感じる
(3)	会議や話し合いで、無意味な発言をする人が多いと思う
(4)	たいした能力を持たないのに偉い地位にいる人が多いと思う
(5)	他人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる
(6)	大切な仕事を任せられるような有能な人は、私の周りに少ないと思う
(7)	他人を見ていて「こういう人が社会をダメにしている」と感じる
(8)	私の意見が通らなかつた時、相手の理解力が足りないと感じる
(9)	今日の日本を動かしてしる人の多くは、たいした人間ではないと思う
(10)	企業では、実力よりも勤務年数や運で出世する人が多いと思う
(11)	世の中には、常識のない人間が多すぎると思う

2) 自尊感情：Rosenberg (1965) による自尊感情尺度の日本語版（山本・松井・山成, 1982）を用いた。全10項目からなり、回答は「1：あてはまらない」から「5：あてはまる」までの5段階尺度上で求められた。

3) 妥当性基準として用いられた他の心理学的構成概念

①統制の位置：鎌原・樋口・清水 (1982) による Locus of Control 尺度を用いた。自分の行動と強化が随伴しないと認知し、強化が運や他者などの外的要因にコントロールされているという信念（外的統制）と、自分の行動と強化が随伴すると認知し、自分の能力や技能により強化がコントロールされているという信念（内的統制）の相対的強度を測定する尺度であり、全部で18項目からなる。回答は「1：そう思わない」から「4：そう思う」までの4段階尺度上で求めた。内的統制傾向が高いほど得点が高くなるようにスコアリングした。

②自意識：菅原 (1984) による自意識尺度を用いた。公的自意識（他者が観察しうる自己の側面に注意を向ける程度）は11項目、私的自意識（他者からは観察されない自分の側面に注意を向ける程度）は10項目の下位尺度からなる。回答は「1：全くあてはまらない」から「5：とてもよくあてはまる」までの5段階尺度上で求めた。

③孤独感：落合 (1983) による孤独感の類型判別尺度を用いた。人間同士共感しあえると感じ、考えているか否かという理解の次元については9項目、個別性に気づいているか否かに関する個別性の次元については7項目からなる尺度である。回答の方式は「1：いいえ」から「5：はい」までの5段階評定尺度であった。

④共感性：木野・鈴木・速水 (2000) の多次元共感性尺度の改訂版が用いられた。この尺度は本来、共感性の認知的側面と情動的側面に関する下位概念から構成されているが、このうち、情動的側面に関する、他者指向的情緒反応、自己指向的情緒反応、被影響性について測定した。「他者指向的情緒反応」とは他者の心的状態に対して他者に焦点づけられた情緒反応を示す傾向を、「自己指向的情緒反応」とは他者の心理状態に対して自分に焦点づけられた情緒反応を示す傾向を、「被影響性」とは他者の感情や態度、あるいは流行からの影響の受け易さを意味する。回答は「1：全くあてはまらない」から「5：とてもよくあてはまる」までの5段階尺度で求められた。

⑤怒りの感情：Spielberger (1988) による STAXI の日本語版（鈴木・春木, 1994）を用いた。この尺度は怒りに関する5側面、状態怒り、特性怒り、怒りの表出、怒りの抑制、怒りの制御を測定するものである。ここでは状態怒り以外の下位尺度を用いた。「特性怒り（9項目）」はパーソナリティ特性としての怒り易さの個人差を、「怒りの表出（7項目）」は怒りを外部に向ける傾向を意味している。また「怒りの抑制」は怒りを内にためる（心の中に抱く）傾向をみるものであったが、ネーミングと意味が必ずしも一致しないように思われ、これを

我々は「怒りの沈殿（6項目）」と新たに名づけた。さらに「怒りの制御（7項目）」は怒りが外に出るのを抑え、認知的に制御する傾向を測定するものであった。回答は「特性怒り」に関しては「1：全くあてはまらない」から「5：とてもよくあてはまる」まで、それ以外は「1：まったくしない」から「5：とてもよくする」までの5段階評定尺度上でなされた。

⑤感情経験：主観的ウェルビーイングの情緒的側面を測定するために、鈴木（2002）において利用された尺度に若干の変更が加えられたものを用いた。快感情、不快感情をそれぞれ6項目ずつあげ、学業、友人関係、家族関係の各場面において過去3ヶ月の間にそれぞれの感情を経験した程度を「1：全く感じなかった」から「5：と

ても感じた」まで5段階評定尺度で尋ねた。

⑦生活満足度：主観的ウェルビーイングの認知的側面を測定するために、鈴木（2002）において利用された尺度に若干の変更が加えられたものを用いた。全般的な生活満足度に加えて、被験者の生活の中心となる学校生活の学校生活満足度と家庭生活満足度、および対人関係の中心である友人関係における友人満足度をみるもので、それぞれ6項目ずつで構成されていた。回答は「1：全くあてはまらない」から「5：とてもよくあてはまる」までの5段階評定尺度上で求められた。

## 結果

Table 2は本研究で実施された様々な心理的構成概念

Table 2 仮想的有能感および自尊感情と他の心理学的構成概念との関連

	仮想的有能感	自尊感情	N	M	SD	$\alpha$
統制の位置	-0.154	0.361***	120	50.17	6.59	0.72
自意識						
公的自意識	0.025	-0.206	74	40.93	8.23	0.89
私的自意識	0.238*	-0.127	75	36.76	6.23	0.84
孤独感						
理解	-0.224	0.201	75	36.84	6.70	0.88
個別性	0.272*	-0.054	75	22.63	5.19	0.65
共感性						
他者指向的情緒反応	-0.135	0.169	125	15.26	2.83	0.72
自己指向的情緒反応	-0.194*	0.073	125	12.86	2.97	0.63
被影響性	-0.244**	-0.147	125	12.74	2.94	0.69
怒りの感情 (STAXI)						
特性怒り	0.273*	-0.103	119	25.87	5.25	0.81
怒りの表出	0.397***	-0.135	120	17.13	3.78	0.66
怒りの沈殿	0.207	-0.114	119	17.38	3.24	0.71
怒りの制御	-0.227*	0.091	119	20.31	4.26	0.84
感情経験 (過去3ヶ月)						
学業 (快感情)	-0.141	0.266**	125	15.10	4.89	0.86
友人関係 (快感情)	-0.092	0.289**	125	23.62	4.85	0.90
家族関係 (快感情)	-0.189*	0.129	125	20.82	5.35	0.88
学業 (不快感情)	0.222*	-0.210*	125	19.51	4.73	0.81
友人関係 (不快感情)	0.237**	-0.321***	125	16.06	5.09	0.85
家族関係 (不快感情)	0.121	-0.223*	125	14.16	4.83	0.84
生活満足度						
学校生活満足感	-0.195*	0.460***	125	20.07	4.81	0.82
友人関係満足感	-0.199*	0.337***	125	22.86	4.16	0.81
家族関係満足感	-0.131	0.297***	125	23.34	4.89	0.84
全般的な生活満足感	-0.132	0.459***	125	20.77	5.08	0.86

無相関検定 \*... $p < .05$  \*\*... $p < .01$  \*\*\*... $p < .001$

の平均および標準偏差, および ACS, 自尊感情との相関係数を示したものである。

まず, 統制の位置に関しては ACS と内的統制傾向とは予想通り負の関係がみられたものの, 有意ではなかった。一方, 自尊感情に関しては高いほど内的統制傾向が高いといえた。

自意識との関係では ACS は公的自意識とは無相関であるが, 私的自意識とは .238 で有意な正の相関がみられた。予想通り, 仮想的有能感が高いほど自分の内面に注意を向ける傾向があるといえる。一方, 自尊感情とは公的自意識, 私的自意識とも負の相関がみられたものの有意ではなかった。

孤独感に関しては, ACS が妥当なら理解の次元とは負の, 個別性の次元とは正の関係が予想され, 結果的に正負の方向は支持されたものの, 後者の相関だけが有意であった。また, 自尊感情はいずれの次元とも有意な関係は認められなかった。

続いて共感性に関しては予想通り仮想的有能感が高いほど3つの下位尺度とも低いという関係がみられた。つまり ACS で高い得点を示した人は共感性が低かった。ただし, 他者指向的情緒反応との相関は有意ではなかった。一方, 自尊感情と共感性は一貫した関係がみられなかった。

次に怒りの感情に関しては3つの下位尺度で ACS との間有意な相関がみられた。すなわち仮想的有能感が高いほど特性怒り, 怒りの表出得点が高く, 怒りの制御が弱いことになる。これに対して自尊感情と怒りの感情の間には一定方向の関係は認められなかった。

感情経験に関して ACS は快感情とは負, 不快感情とは正の関係があれば, 測定が妥当であろうと予想した。快感情は家族関係で不快感情は学業と友人関係で予想された有意な関係がみられた。一方, 逆の関係, 快感情とは正, 不快感情とは負の関係が自尊感情との間により明瞭に認められた。

生活満足感に関しては4つの領域すべてで ACS との間負の関係を予想した。確かに負の関係はみられたが有意な負の相関は, 学校生活満足感と友人関係満足感の2つの領域のみであった。自尊感情は満足感とはすべての領域で高い正の相関関係を示した。

## 考 察

先に述べたように, ここで仮想的有能感と呼んでいるものは, 直接的には他者を軽視するという態度や行動からもたらされるものである。そして, 他者軽視をする傾向というのは, 自分自身のあり方について大いに気がかりであるが, 自分で自分を十分制御していけるとは考え

られないという弱さから生じていると考えた。その意味で私的自意識とは正の関係を, また, 内的統制とは負の関係を予想した。前者は支持されたが, 後者については方向としては支持されたものの, 有意な関係はみられなかった。

また, 他者軽視をする背景には人間関係の調整のまずさのような傾向が存在すると仮定した。すなわち, 共感性に乏しく, 孤独を感じやすい人が, 他者の価値を十分認識できないために, 他者を低く評価することで自分をもちあげようとするのではないかと推測した。結果としては ACS の高い人は共感性に欠けるという関係性が示された。また, 孤独感に関しては ACS の高い人は人間が相互に理解しがたいものと考え, 人間の個別性への意識が強いことが示され, ほぼ予想が支持されたといえる。

さらに真の有能感ではなく, 他者軽視に基づく仮想的有能感を抱かざるを得ないのは彼らが日常生活全般に不満が多く, 不快な感情を抱くことが多いからである, あるいは仮想的有能感を抱くことで必然的に不快な感情を抱くことが多くなると考えた。特に不快な感情の代表的なものである怒りの感情に関しては, 自分は有能であり, それに比べて他者は無能であるという立場から, 地位の高い人が低い人に怒り易いように, 怒りを生起させやすいと考えた。現在の若者たちがよくキレルというのは, 真の意味で自信があるわけではない。事実, それは自尊感情の国際比較研究, あるいは年齢別の研究からも日本の若者は概して自尊感情が低いことが知られている(河内, 2003)。だとすれば別のメカニズムが働いているわけで, それがここでいう仮想的有能感にあたるものだと考えられよう。研究結果は上述のことをほぼ支持していた。

この結果をまとめたものが Fig. 1 であり, 以上の結果からみる限り ACS はわれわれが想定している概念を測定している。すなわち構成概念妥当性が一定程度あるといえる。自尊感情とはまったく異なる概念であることも示された。しかし, いうまでもなく, 妥当性がこの研究で完全に検討されたというわけではなく, 今後とも他の心理学的構成概念との関係をみる研究を積み重ねる中で「他者軽視に基づく仮想的有能感」の概念をより明瞭にしていくことが肝要である。

ところで冒頭にも述べたように妥当性の検討は様々な角度からなされる必要がある。現在, 我々は次のような妥当性検討を実行したり, 計画している。その第1は本研究と同様の他の心理学的構成概念との関係であり, 16 PF との関係も検討している(山田・速水, 2004), 第2は仮想的有能感に関する他者評価との関係みることによって妥当性を確認しようとするものである(高木・速水・木野,

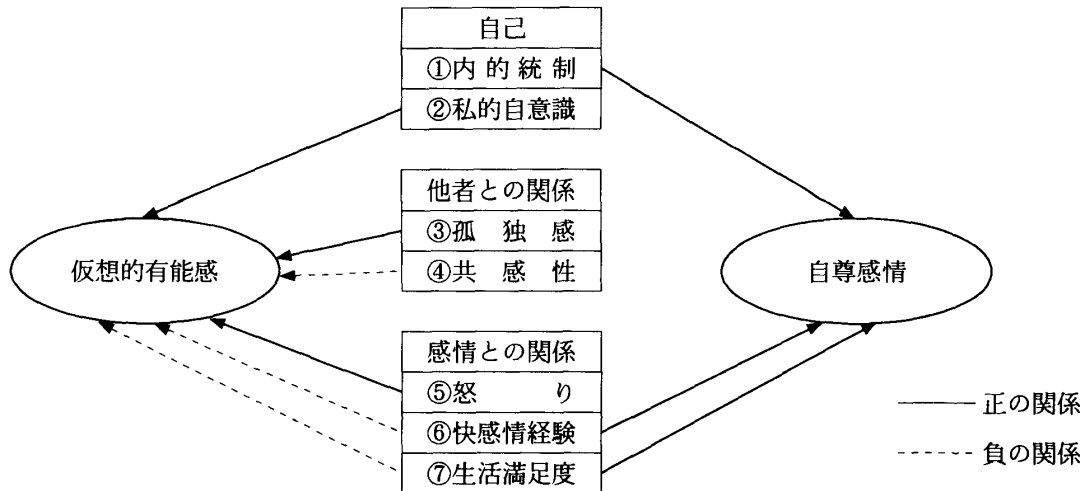


Fig. 1 仮想的有能感および自尊感情と他の心理学的構成概念との関係

2004)。さらに第3は本来の仮想的有能感が無意識的なものだとする、それを何らかの外的刺激によって喚起させることで有能感を高め、パフォーマンスや期待に反映させることで妥当性を検証しようとするものである。

最後に、「仮想的有能感」という構成概念の問題点についてふれておこう。本研究の結果からは、ある程度の妥当性が示されたものの、実は冒頭にあげたこの概念の問題点、すなわち他者軽視がすなわち仮想的有能感といえるのかという疑惑が払拭されたわけではない。仮想的有能感は過去の成功・失敗経験に関係なく、形成されるものというようにこれまで説明してきたが、自尊感情との特定方向の関係がないことを考慮すると、仮想的有能感の高い人の中には自尊感情の低い人だけでなく、自尊感情の高い人も存在することになる。そして、2つの変数の組み合わせを単純に考えれば、4つの型が存在することになる。これを示したものがFig. 2である。この図でBにあたる人は、現実には自信がないために防衛的に他者を低く評価することで有能感をえようと推測される。他方、Aの人たちは自分に自信があるからこ

者を低く評価して、当然のこととして有能感を抱くと考えられる。だとすれば、両者の「仮想的有能感」の意味合いは異なることになる。「仮想的」という言葉を冠するのは前者に属する人たちがよりふさわしいのかもしれない。さらにACSの得点が低いCとDにあたる人たちもそれぞれ異なる特徴を有していると考えられる。このように4つの型に分けて特徴を検討していくことが今後の課題であり、それによって概念の意味も明確化するものと思われる。

引用文献

Baumeister, R. F. 1998 The self. In D. T. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lindley (Eds.) *The Handbook of Social Psychology*. 4<sup>th</sup> edition. Vol. 1. New York: McGraw-Hill. Pp. 680-740.

遠藤辰雄 1992 セルフ・エスティーム研究の視座 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽(編) セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ Pp. 8-25

速水敏彦・木野和代・高木邦子 2003 自主シンポジウム 「仮想的有能感」をめぐって 日本教育心理学会第45回総会発表論文集 S46.

速水敏彦・木野和代・高木邦子 他者軽視に基づく仮想的有能感 -自尊感情との比較から- (投稿中)

鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, 30, 302-307.

河内和子 2003 自信力はどう育つか -思春期の子ども世界4都市調査からの提言 朝日新聞社

香山リカ 2004 <私>の愛国主義 ちくま新書

木野和代・鈴木有美・速水敏彦 2000 友人の不快感情調整に関わる要因の検討 -女子青年を対象に-

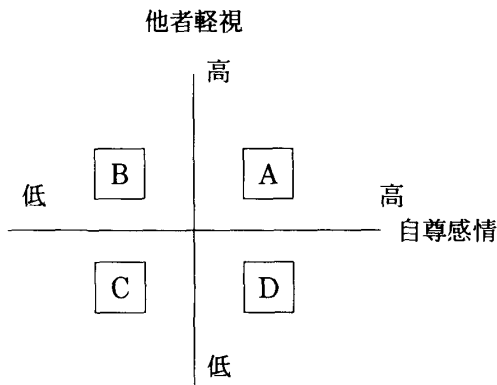


Fig. 2 他者軽視と自尊感情による分類

- 名古屋大学大学院教育発達科学研究科（心理発達科学）, 47, 59-68.
- 落合良行 1983 孤独感の類型判別尺度(LSO)の作成  
教育心理学研究, 31, 332-336.
- Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancy for  
internal vs. external control of reinforcement.  
*Psychological Monographs*, 80, 1-28.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent  
self-image*. Princeton: Princeton University  
Press.
- Spielberger, C. D. 1988 *Manual for the State-Trait  
Anger Expression Inventory (STAXI)*.  
Odessa, FL: Psychological Assessment Re-  
sources.
- 菅原健介 1984 自意識尺度 (self-consciousness  
scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55,

- 184-188.
- 鈴木平・春木豊 1994 怒りと循環器系疾患の関連性の  
検討 健康心理学研究, 7, 1-13.
- 鈴木有美 2002 自尊感情と主観的ウェルビーイングか  
らみた大学生の精神的健康 名古屋大学教育発達科  
学研究科紀要（心理発達科学研究科）, 49, 145-155.
- 高木邦子・速水敏彦・木野和代 2004 仮想的有能感尺  
度の妥当性検討 日本教育心理学会第46回総会発表  
論文集 33
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自  
己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 山田奈保子・速水敏彦 2004 仮想的有能感と性格検査  
との関連—16PMとの関連から— 日本パーソナリ  
ティ心理学会第13回大会論文集 100-101  
(2004年9月30日 受稿)

## ABSTRACT

### Examination on Construct Validity of Assumed-Competence Scale

Toshihiko HAYAMIZU, Kazuyo KINO, Kuniko TAKAGI

A new construct “Assumed-Competence based on undervaluing others (AC is short for the construct)” was proposed to explain adolescents’ behaviors in these days. AC was defined as the habitual feeling of competence that would be followed by one’s criticizing or undervaluing others regardless of how much he/she had directly positive or negative experiences. To measure the individual differences of AC, the assumed-competence scale (ACS is short for the scale) consisting of 11 items was constructed

The purpose of this study was to examine the construct validity of ACS by showing the relations with several psychological constructs which have logical associations with AC. In the meanwhile, self-esteem (SE is short for it) mean true competence based on really positive and negative experiences. That is, SE could be clearly discriminated from AC. Thus, to make clear discriminating validity of ACS, SE was measured as well as AC when the relations with other psychological constructs were investigated. Seven psychological constructs we used here as criteria of validity were (1) locus of control, (2) public and private self-awareness, (3) loneliness, (4) sympathy, (5) emotion of anger, (6) pleasure and displeasure experiences (during lately three months) and (7) life satisfaction. Participants were 124 junior college students, 258 university students and 11 graduate students.

Correlation coefficients between AC, SE and seven psychological constructs were calculated. The results were interpreted by focusing only significant correlations. Concerning self, although SE was related positively to internal control, AC was not, whereas positive relation between ACS and private self-awareness was shown. Next, regarding with interpersonal relationship, AS had positive relations to loneliness, that is, the persons whose AS are high thought that human could not understand each other and they were strongly aware of individuality. Also negative correlation was presented between AC and sympathy. In the meantime, SE had no relation to the variables of interpersonal relationships. In tern, emotion as a criterion of validity was examined. AC was related positively with trait-anger, expression of anger and displeasure experiences in academic and friendship situations. Furthermore, AC had negative relation to life satisfaction. On the contrary, SE was correlated positively with pleasure experiences and life satisfaction.

Based on the results mentioned above, we judged ACS to have construct validity to some extent. Finally we suggested the possibility of classification of AC in the relation with SE.